

Title	飯田鼎著 マルクス主義における革命と改良： 第一インターナショナルにおける階級，体制および民族の問題
Sub Title	Revolution and reform in Marxism, problems on the social classes social structures and nationalities, 1966, by Kanae Iida
Author	玉井, 茂
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.12 (1966. 12) ,p.1480(116)- 1484(120)
JaLC DOI	10.14991/001.19661201-0116
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19661201-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

飯田鼎著

『マルクス主義における革命と改良』

——第一インターナショナルにおける階級、体制および民族の問題——

玉井 茂

本書は第一に、副題にあるように第一インターナショナルの研究である。一八六四年九月ロンドンで発足したこの「国際労働者協会」について、本書は豊富な資料を駆使して、その形成過程（第一、二章）、その成立（第三章）、その発展と矛盾（第四章）を論述している。第一インターナショナルは、ヨーロッパの先進的な三大国、イギリス、フランスおよびドイツの労働者階級の組織であったが、とくにイギリス——マルクスが当時すでに「人口の大多数が賃労働者として存在している唯一の国」であり、「資本の本国」であるとしたイギリスの役割は大きかった。したがって、第一インターの形成史は、同時にイギリス労働運動の発展史ともなり、その意味では本書は、著者の前著『イギリス労働運動の生成』（一九五八年、有斐閣）

改良との弁証法的統一として規定しようとする。そしてまさにこれこそが本書の主題であった。

第一インター期のマルクスは、イギリスの労働組合主義を、たとえそれが改良主義的であるような場合にも、初期マルクスのようにこれを拒絶せず、むしろ幅広いこれとの協力と提携の必要を説くようになっていた。しかもそれは、労働組合のもつ「経済的な要求（＝改良）」を組合を媒介にして、「政治的性格」にまで高めようとするためで、ここに著者は「革命と改良とを統一的に、弁証法的に把握しようとするマルクスの努力」をみようとする（二四六ページ）。マルクスがイギリスの労働者階級への期待を捨てず、ブルジョア的な組合主義とも協調した根拠、これを著者はさらに民族の問題のなかにさぐり、「イギリスのプロレタリアートの階級闘争が、実に民族解放闘争と社会主義的反体制の運動とを結びつける環であり、媒介項である（マルクスが）考えていたからではなかったか」と提言する（二四八ページ）。かくて、「産業資本主義段階の爛熟期ともいうべき一八六〇—一八八〇年において確立されたマルクス主義の革命に関する一般的原则」は、「革命と改良の統一」を「径（タテ）」とするほか、「体制と民族との媒介項としての階級的視点の把握」を「緯（ヨコ）」とするものとしてとらえられる（九ページ）。したがって、本書は第四に、「階級、体制および民族の問題」の研究であり、被圧迫民族の問題、民族解放の問題にもかなりのページ（第二章二、第三章一ほか）が当てられている。結論的には、第一インターのマルクスは、「民族的利益の名のもとに戦争を選ぶこと」でなく、「階

の統篇をなすものとして、第二にイギリス労働運動史でもある。

第一インターの創立宣言を書いたのはマルクスであった。マルクスはエンゲルスとともに「第一インターナショナルに積極的に参加し、……その『たましい』に科学的社会主義の理論を注入し、資本主義の新しい状態に相応する点に国際的な団体」をつくらうとしたのである（本書七ページ）。したがって、ここには一八六〇—一七〇年段階の成熟したマルクス、一八四八年以前のいわゆる「初期マルクス」の「終焉」がある。この点からは本書は、第三に「初期マルクスの終焉」の研究、成熟期マルクスへの移行の研究でもある。この移行は、労働疎外論から剰余価値説への移行、革命的民主主義から科学的社会主義への移行であり、これについてはすでに多くの研究がなされた。だが著者の関心の中心はマルクスの革命論および労働組合論にあり、この点の研究は乏しいだけに、本書の独自性もここにある。たしかにこの方面でユニークな研究といえる。組織論や戦術論が問題となる革命とか労働組合の領域では、マルクスの「現実政治家」としての一面を論じることも必要であろう。だが著者の関心は、「理論家」としてのマルクスにあり、あくまで原則と理論のレベルでアプローチする。そうした著者にとって、「第一インターナショナルにおいて、マルクスとエンゲルスが実践し、且つ運動の方針として訴えたところのものは、革命的視点と改良的視点との統一的な理解と把握であった」のである（一一ページ）。すなわち著者は、一八六〇—一七〇年段階のマルクスの革命論および労働組合論の性格を、体制変革的な政治主義的革命と体制内的な経済主義的

級的視点を媒介項として、体制と民族の問題との有機的関連を明らかにすること」を方針とした、といわれる（一一ページ）。

二

マルクスをして初期の革命観を自己批判させたものの、「社会革命の問題を中心にして、階級、体制そして民族という三つの問題の科学的把握」にもとづく新しい革命観に赴かせたもの、それは一八四八年の革命であった。この年、フランスの二月革命、ドイツの三月革命に接し、共産主義者同盟の分裂、チャーティスト運動の失敗を経験したマルクスは、その後「イギリスを中心とする資本主義のめざましい発展のなかで……静かな研究生活とジャーナリズムを通じて活動していた」。当時のマルクスは「運動と組織上の困難に絶望しながらも」新しい任務を「第一に、世界史の新しい展望にたいして思想的準備をすること、第二に、体験した革命のあらゆる経験をとりいれて、新しい戦術をつくり出すこと」に見出した、とされる（一九三ページ）。その結果は、一つは「体制変革＝革命」を「民族問題」と結合させ統一させることであったが（一九四ページ）、一つは、イギリス労働運動の敗北と勝利を確認してその成果を第一インターに結実させることであった。

マルクス主義の遺言書といわれて有名な『フランスにおける階級闘争』の序文（一八九五年）で、老エンゲルスは「一八四八年の闘争方法は、今日では、あらゆる点で時代おくれとなっている」と、率直に当時における自分らの「幻想」をみとめている。たしかにマル

クスが当時のお現実認識にあまいところがあり、永続革命を、さらに少数革命を、ミリタントに唱導したことは事実のようだ。『共産党宣言』(一八四八年)で、ドイツのブルジョア革命に「プロレタリア革命の直接の序幕」をみたように、『共産主義中央委員会へのよびかけ』(一八五〇年)でも、労働者の革命的組織の必要を説き、「全プロレタリアートを武装することをただちに実行しなければならぬ」と説いている。だが、本書の著者によれば、その場合でもエンゲルスの方は、より多くドイツ労働者階級の「未成熟」、その結果としての「組織的弱さ」に注目しており、「むしろ悲観的」であった(一〇九—一一〇ページ)。マルクス自身もウァイトリングを批判し、ブランキ主義と闘ってきたことを思えば、この弱さに無知だったのではないが、ただより多くプロレタリアートの「革命実践」のもつ強さに注目していたと解される。したがってかれもまた、よく一八六〇年代に「イギリス職能別組合の確固たる組織」を目前にして「より現実的に実践的に」なり、労働者の組織への期待を深める。『革命後の労働者階級の沈滞と政治的無力の状態』、『労働運動の敗北』、とくにチャーティスト運動の敗北」を率直にみとめながら、マルクスは十時間法を結実させた工場立法や協同組合運動に、労働者階級の「部分的な勝利」をみとめ、これらを個々の改良として革命と対立せしめることをやめる(二一九—二二〇ページ)。第一インター段階のマルクスは、その「高い政治意識とともに、経済闘争の強固な組織としての労働組合」に「特別の関心」をもつようになつたが、それを著者は「賃労働と資本」の補足とみられる手稿「賃

金」の論述にたしかめる(二四四—二四六ページ)。ここでマルクスは、労働組合への労働者の「団結」は、元来、賃金の引き上げ、労働条件の改善など「経済的要求」を目的とするが、資本家の抑圧に反対して「組合の維持」を目的とするようになり、抑圧と闘争する「政治的性格」をおびる、と説いている(改良と革命との結合)。そしてマルクスのこのような考え方が、『第一インターナショナル創立宣言における労働者階級運動の、新しい客観的諸条件のもとでの発展にたいする、より新しく且つ巨視的な視点』となつた、とされる(二四七ページ)。

永続革命論の初期マルクスに較べると、ここには「修正」がみられる。しかし、改良の尊重が革命を見失わせたのではない。プロレタリアートのもつ「革命実践」こそマルクスには重要である。この点、本書の著者が「マルクスによるプロレタリアートの認識」を有名人「シュレジェンの蜂起」(一八四四年)にみていることは達見であろう(六二、六三、七五、七六ページ等)。マルクスはシュレジェンの労働者の蜂起を「これほど勇敢に、ねばり強くおこなわれたものはなかった」と讃えただけでなく、これが「フランスとイギリスの労働者蜂起の終つたところから、つまりプロレタリアートの本質の自覚から始まっている」ことを指摘して、その理論的水準や意識性に着目している。「人間の本質は人間の真の共同体である」と規定するマルクスは、ここに自分の革命の哲学を確認した、と私も思う。そしてこの哲学は、『共産党宣言』で高揚されたまま捨てられたのではなく、第一インター段階にも持続している。だからこそかれは、

金」の論述にたしかめる(二四四—二四六ページ)。ここでマルクスは、労働組合への労働者の「団結」は、元来、賃金の引き上げ、労働条件の改善など「経済的要求」を目的とするが、資本家の抑圧に反対して「組合の維持」を目的とするようになり、抑圧と闘争する「政治的性格」をおびる、と説いている(改良と革命との結合)。そしてマルクスのこのような考え方が、『第一インターナショナル創立宣言における労働者階級運動の、新しい客観的諸条件のもとでの発展にたいする、より新しく且つ巨視的な視点』となつた、とされる(二四七ページ)。

であつた、と論じられている(三六四ページ)。

三

著者の指摘するように、その創立宣言で、労働者大衆の窮乏が、一八三四年から一八六四年にかけて減少していない」と窮乏化法則を確認するとともに、「しかもこの期間には、産業の発展と商業の増大では匹敵するものがない」と資本主義的發展をみとめ、その蔭に労働者の沈滞と墮落と政治的無力の進行を見のがさない(二二七—二二九ページ)。おこぼれの多さに喜ぶ労働者への警戒、チャーティスト運動衰亡後のイギリスの職能別組合にある「労働貴族的・日和見的傾向の危険」への警戒(二四四ページ)——これらは、革命が改良の中に解消すべきでないとするマルクスの原則である。要するに改良主義者でないマルクスでは、いわば「改良」はシュレジェンの「チャーティスト的「改革」を内包すべきものである。それなればこそ、前記エンゲルスの「序文」(一八九五年)の回顧をマルクス主義革命理論の根本的な修正とみたベルンシュタインは、明らかに修正主義であつた(三六七ページ)。第一インターでのマルクスは、「個々の政治上・経済上の日常的要求を不断にちかちか改良の意義を全く無視する者」としてのバクーニンと闘つた(三五五ページ)。しかしマルクスはバクーニンの革命意欲に反対なわけではない。マルクスがいかに国家の発展の不均衡を説き、「平和的移行」の可能性を説く場合にも、かれの労働者は「いつかは政治的権力を獲得しなければならぬ」のであり「旧制度の支えとなつて旧政治体制を転覆しなければならぬ」のであり、あくまで「労働者がやがて訴えるべきものは、まさに強力である。要するに、かれにあつては、『革命のために果す改良の役割を正しく評価すること』、これが原則

私は安保のころ、チャーティストたちの「実力派」と「言論派」との対立抗争に興味をもち、それ以来この運動を思想史の一章として研究してきたため、著者の旧著にはお世話になつたし、上に大綱を紹介した新著にも教えられるところが多い。成熟したマルクスを「革命と改良との統一」としてとらえる著者には共感をおぼえるし、今もなお経済闘争が政治闘争が基本的な問題であるわが国の組合運動にも、おそらく本書は理論的な寄与が大きいだろうと思う。ただ、初期マルクスの疎外論から成熟期の剰余価値説への移行の連続が飛躍かの問題、すなわち初期のヒューマンズムを後のマルクスは発展させたのか克服したのかの問題、これに結びつけてチャーティスト運動はマルクス主義に何を教えたか、マルクス主義の源泉であるかどうかの問題、そもそもチャーティズムはイギリス社会主義思想史にどのような位置を与えらるべきかの問題、これらに関心のある私は、本書を見ないままに昨年一試論を書き、いま本書を見て多大の教訓をえたが、なお残された問題は多いであろう。——上の問題についてもそうであるし、例えば著者の「革命と改良との弁証法的統一」についても、「自然発生性」と目的意識性の二つの側面について、より詳細な内的構造の分析が期待される。おそらく著者のこの両概念の統一は、若いマルクスが「当為」と「存在」との統一として扱えたものであろうが、労働者の存在(改良・自然発生性)

がその当為(革命・目的意識性)と分裂しているとき、前者を後者に高揚させるものは何か、もし内発的とすればその発源をどう把握すべきか、両者は統一よりも分裂の必然性を内包しているのではあるまいか? ここには科学的社会主義に対するモラルの問題、ひいてはサルトルが唯物史観に導入しようとする人間の問題が伏在しているであろう。おそらくこんなことは著者の問題外かもしれぬが、著者の社会史的・経済史的資料の提供や概念の深化はこんな問題にも役立つのであるから、ご研究の進むよう著者の健康を祈ることによって私の喜ばしい期待を表明しておきたい。

※「チャーティズムとマルクス主義」岐阜大学教養部研究報告・創刊号(一九六五)

(御茶の水書房・A5・三七五頁・二二〇円)

安川正彬著

『人口の経済学』

矢崎 武夫

現在ほど人口問題が世界の注目をあびたことは歴史上未だ曾てなかったであろう。それは世界人口の加速度的増加の傾向と、後進国

に於ける急速に増大する人口に対する低い生産力、就業機会の不足や低所得、高い文盲度、更に問題解決のための出生力コントロールの問題や先進国の工業化都市化に伴う人口構造の変化、急上昇する生産力に対する労働力の不足、後進国、先進国を問わず移動による大都市への人口集中、これに伴って生じ、解決を迫られる諸問題等世界諸国の直面する諸問題の解決を図るには、人口からの問題の把握こそ、その基礎をなすものだからである。

一九六五年に国連の世界人口会議が開かれたのを初め、一九六六年日本が主催国となり、世界最大規模の学術会議と言われる太平洋学術会議に於ては、人口問題に焦点があわされた。現在人口問題は急激に変動しつつある世界諸国の動向の分析とその対策の樹立のために不可欠の知識となり、人口学は社会諸科学の基礎科学となっている。従って世界の凡ゆる国々に於て人口に関する組織的な研究が発展して来ているが、米国はこの分野で最も多くの業績を重ねて来ていると言つてよいであろう。米国では、一般的傾向としては、人口学は American Science と言われる社会科学の基礎科学、或はその部門をなすものとみられている。社会学が経験科学として精密化して来る程、研究の分化が起っているが、社会学が科学として進歩して来る程、人口学は社会学の中で一層重要な地位を占めるに至っている。

日本に於ては経験科学としての社会学の歴史が浅く、人口問題は主として経済学の分野で扱われて来た。近代に入つて日本の社会は常に変化し、人口問題が極めて重要であるに拘らず、極めて限られ

た数の優れた研究はあつても、研究者の数や、大学に於ける講義数は少く、人口の組織的研究は充分であるとは言えない状態にある。このときに経済学の立場からの人口研究を専攻する著者が、多年蓄積された知識を基礎に理論及び技術に於て極めて高度の組織的研究を公にして、日本の人口学の発展に貢献されたことは、日本の学問の進歩のために誠に嬉しいことであつた。人口学の国際的権威、館稔博士が、本書に於て新聞及び学術雑誌上に、日本人口学会近來の収獲であると賞賛され、人口学を専門とし或はこれに関心を有する多くの人から絶賛を博したことは当然のことであつた。

二

私は以下に於て著者の述べるところを著者の論理に従つて出来る限り忠実に紹介しながら、社会学の側面から人口に関心を持つものとして本書に関する私見の若干を述べたいと思う。

著者は先ず人口という現象を集合概念をもって捉え、人口を人々が集団をなして資源に働きかけ、経済社会生活を営む一定の構成体とみる立場をとっている。経済は社会の一部であるが、人口が社会と接触するとき経済を通じて行い、経済は社会を構成する基盤であつて「人口の経済学」と題する本書の基本的な目標は、この中からその基本的な部分としての人口と経済がどのように結びついているかという課題を整理することにあるとしている(三十四ページ)。

また著者は人口の経済学の課題は「経済の短期的考察において人口は与件として経済の外におかれるから人口は経済の内部に

侵入することなく、経済の短期理論が形成されるときの外枠を正しく決めて、枠組みを固める仕事を請負っているということである。そして経済の長期的考察に於ては人口と経済の相互の因果律を明らかにする任務を負わされている……(二ページ)として経済学の内部に於ける人口経済学の立場を明らかにしている。

本書の本文は三編からなっているが、編集方法として本書の内容の要約と、本研究から得た結論を先に置き、次に本文に入るという方法をとつて、予め筆者の基礎的な立場を明らかにしているのみならず、本書の組織の論理的構造を明らかにして、読者に本書の理解を容易にし、筆者が本研究を通じて如何なる研究上の成果を得たかを明らかにしている点は、読者に対して極めて親切であるのみならず、帰納的に本書の存在意義を明瞭にした優れた方法である。

第一編はマルサスに始まる人口学説が、社会経済構造の変化とそれに対応して発展した経済学理論との関連に於て捉えられ、アダム・スミスに始まり、今日に至る経済学に於ける人口学の系譜を綿密にたどっている。著者は全体の系譜を一目で解し得る鳥瞰図を開口の口絵に示し、これによって各学説の現れた時代、流動経路を位置づけ、読者の理解を助けている。

経済学に於ける人口研究の焦点となるのは、フランス革命からナポレオン戦争終結、即ち十八世紀末から十九世紀初頭にいたる急速な人口の増大が問題となったマルサス時代と、もう一つは人口増加が極度に減じ、不況に悩んだ一九二〇年のケインズの時期である。この二つの時期に人口問題は夫々異った対蹠的な角度からとりあげ